

【研究ノート】

中世東国の水運と江戸の位置付け

——家康はなぜ江戸を選んだのか——

岡野友彦*

目次

- はじめに
一、中世東国の水運をめぐる研究史
二、中世における江戸の位置付け
おわりに

キーワード 中世東国水運 江戸湾内交通 利根川・常陸川水系

品川と伊勢 関八州国家体制 後北条政権

家康神話 道灌伝説

はじめに

ここ数年間における中世東国の水運に関する研究の進展には、まさに目を見張るものがある。かつて、平氏の水軍に対する源氏の騎馬軍などといったイメージから、全く注目されることのなかった中世東国の水上交通が、実は予想以上に活発に行われていたことが

次々と明らかにされつつあるのだ。かかる活発な研究の中で、中世における江戸の位置付け、特に近世都市江戸の源流としての位置付けは、今まさに再考を迫られているということが出来る。

これまで、中世の江戸は家康が入るまで小さな漁村であったとされ、そのような寒漁村を、海運の至便さや後背地の広さといった地理的特性から自らの城下町として選び、一大都市に発展させた家康の先見性ばかりが強調されてきた^①。そして、かろうじて取り上げられるのは太田道灌の存在のみであり、後北条政権下の江戸は殆ど無視されていたとすら言える。しかし、家康は本当に小さな漁村としての江戸の地を、その卓見のみで自らの城下町として選び、一大都市に発展させたのであろうか。否、そもそも家康以前の江戸は、本当に小さな漁村だったのであろうか。

ところで筆者は、江戸東京博物館に準備段階から奉職し、開館前には中世の江戸について扱った「通史展示」を担当した。この業務を通じて筆者は、中世の江戸について考える機会を得たわけである。中世公家領荘園を専攻する筆者にとって暗中模索の毎日であったが、

* 元当館学芸員・現皇學館大学専任講師

門外漢ながらも自らの視野を拡げることができたのは幸いであった。そして、専門委員である段木一行先生の御指導や、同僚である斎藤慎一氏との議論の中から、水運を中心とする「東国の流通」というテーマが、中世の江戸を解明するキーワードのひとつになるらしいと考えるに至った。しかしながら後述するとおり、この開館準備段階に当たる一九八〇年代末から一九九〇年代初頭にかけて、このテーマに関する研究は日進月歩の状況であった。そのため、数万点に上る資料の整理や管理といった基礎的かつ不可欠な他業務に追われる毎日の中で、次々と発表される研究業績を正確に追う余裕もなく、かろうじて陶磁器や板碑の流通を中心に若干の展示を構成することしかできなかった。そこで本稿では、業務上の研究を充分展示に活かし切ることができなかった反省を踏まえて、近年急速に進展した中世東国水運史研究の成果を整理し、その中で中世の江戸がどのように位置付けられているのか、またどのように位置付けていくべきなのかについて、検討を加えていこうと思う。

なお、中世東国の水運について論ずる際、注意しなければならぬのが当時の河川の流路とその名称である。周知の通り中世の利根川は今日の江戸川や中川、隅田川を経て現在の東京湾に注ぎ込んでいた。^②このうち隅田川という名称が中世まで遡るものであることは、謡曲「角田川」などから明白であるが、この古隅田川をも含め、栗橋・関宿から葛西や浅草へと至るこの流れを、ひとまずまとめて「利根川」と称し、今日の利根川は「常陸川」と称することとする。また中世の「利根川」の流れ込んでいた今日の東京湾は、中世におい

ては「内海」と称せられていたようであるが、とりあえずこれを「江戸湾」と称して論を進めることとしたい。

一、中世東国の水運をめぐる研究史

今日、まさに隆盛をきわめるに至った中世東国の水運に関する研究の歩みは、以下に述べる三つの時期に大きく区分することができ。即ち、一九七〇年代までの草創期、一九八〇年代の発展期、そして一九九〇年代の充実期である。

一九七〇年代までの中世東国水運史研究は、上述した先入観も手伝って、散見される程度の域をでるものではなかった。そうした中で、既に先駆的な役割をはたしていたのが、小笠原長和氏と高島緑雄氏の業績である。^③

まず小笠原氏は、中世の房総半島と相模・武蔵とが江戸湾の沿岸交通によって深く結び付いていたことを明らかにし、次いで江戸湾から利根川を経て関宿、さらに常陸川を経て銚子へと抜ける河川交通の存在を発見、これを「利根川・常陸川水系」と名付けられた。

一方高島氏は、『品川区史』の編纂を通して中世の品川湊に注目し、この地を中心とする海上交通、特に品川と伊勢・紀伊との太平洋交通の存在について初めて論及された。この三つ、即ち、まず江戸湾内の沿岸交通、次に利根川・常陸川水系の河川交通、そして品川と伊勢の間の太平洋交通という三つは、今日「目を見張る」成果を上げている中世東国水運史の基本的三要素ということができ、この時

期、この三つが既に出揃っているという意味において、これをまさに草創期と称することができよう。

この草創期の研究の上に立って、一九八〇年代、東国水運史研究を大いに発展させたのが、網野善彦氏の日本中世史全体に対する新鮮な提言であった。^④ 網野氏は一連の「非農業民」論や「荘園公領制」論などを通じて、日本中世を自給自足経済とする通説を批判し、日本中世における多様な商品流通の存在を指摘された。そして「島国閉鎖的」という通説に対する批判として、海や川が地域を分けるものとしてよりむしろ地域をつなぐものとして機能していたと主張し、そのことから、水運は西国のみならず東国においても無視できないものであったとされた。この網野氏の提言は、日本中世史のその他の分野と同様、東国水運史に関する今日の活発な研究の、言わば「火付け役」としての役割を充分に果たしたと言える。

さらにこの頃から全国で盛んになっていった自治体史の編纂事業は、関東においても例外ではなく、遠藤忠氏・鈴木哲雄氏・盛本昌広氏らが、「市史研究」や「県史研究」などに優れた研究を発表していった。^⑤ それらの研究は、主として草創期における小笠原氏の提言を受け、江戸湾内の沿岸交通や利根川の河川交通について数々の実証例を積み上げることに成功した。

そしてちょうどその頃、横浜市金沢区にある六浦の上行寺東遺跡が、マンション建設によって破壊の危機に瀕していた。貴重な中世遺跡の保存のために立ち上がった多くの中世史研究者たちは、何故この遺跡が貴重なかを説明しなければならぬという現実的課題

も手伝って、中世における鎌倉から江戸湾への外港としての六浦の位置に注目し始め、江戸湾内交通は学界の注目を集めるに至ったのである。^⑥ 結局この遺跡は保存されなかったが、この遺跡の保存運動がその後の東国水運史研究に与えた影響には多大なものがあるということができる。

こうした発展期の研究を受け、一九八〇年代末以降、充実期の扉を押し開けたのが永原慶二・綿貫友子両氏による品川と伊勢との間の太平洋交通に関する一連の研究であった。^⑦ 中でも金沢文庫所蔵「武蔵国品河湊船帳」の詳細な検討を通じ、中世の品川湊に入港した船の中に伊勢の船が確認できることを解明した綿貫氏の業績は、中世の伊勢・品川間における「隔地間取引」の存在を明確にしたという意味で、まさに画期的と称するに相応しい。更に同じ頃、峰岸純夫氏は発展期の研究を総括し、特に「利根川・常陸川水系」に注目して水運史研究を中世東国史全体の中に位置付けられた。^⑧

この永原・綿貫・峰岸三氏によって開花させられた一九九〇年代の研究を、真に充実したものに成長させたのは、関東各地の歴史系博物館における学芸員たちの努力であった。既に上行寺東遺跡保存運動を通じて江戸湾沿岸交通に論及していた市立市川歴史博物館の湯浅治久氏をはじめ、特に品川区立品川歴史館の柘植信行氏による一連の業績、さらに葛飾区郷土と天文の博物館の谷口栄氏、埼玉県立博物館の宮瀧交二氏らの仕事は、相互に（谷口氏が品川の紀要に寄稿したり、湯浅氏が葛飾の図録に寄稿するなど）交流を見せながら研究を深め、各博物館の優れた企画展示へと結実していった。平

成二年（一九九〇）の横浜開港資料館「江戸湾の歴史——中世・近世の湊と人びと——」展を皮切に、平成五年（一九九三）には埼玉県立博物館「つば・かめ・すりばち」展、品川区立品川歴史館「海にひらかれたまち——中世都市・品川——」展、葛飾区郷土と天文の博物館「下町・中世再発見」展が相次いで開催され、優れた「図録」とともに関連する「館報」や「シンポジウム報告集」なども作成されていったのである⁹。

更にこの同じ時期に、いわゆる「江戸・東京ブーム」の中から、近世都市史を専門とする研究者が家康の江戸入りについて論じる動きが始まった。鈴木理生氏『幻の江戸百年』（ちくまライブラリー、一九九一年）と、水江漣子氏『家康入国——なぜ江戸を選んだのか——』（角川選書、一九九二年）がそれである。これらの研究は、上述してきた中世史研究の側の動向とは一応別の流れであったが、それでもなお、家康が江戸を選んだ前提として中世東国水運の存在に論及している点は注目に値しよう。

そしてその後、一九九〇年代に入ってから今日に至るわずか六年足らずの間に、中世東国の水運について論及した研究は、上述したものを含め三十数本に上る¹⁰。まさに東国水運史は、日本中世史研究の中でも最も注目を集める分野の一つにまで充実してきたのである。

二、中世における江戸の位置付け

以上の雑駁な研究史の整理をもってしても、中世東国の水運に関

する研究が、この十数年の間に長足の進歩を遂げてきたことは明白にできたものと思う。そしてその中でも、A 江戸湾内の沿岸交通、B 利根川・常陸川水系の河川交通、C 品川と伊勢の間の太平洋交通という三つの航路の存在が、この十数年の研究を通じてますますクローズアップされてきたという事実も、明確にできたと言える。とすると、当然次に注目されてくるのは、このA・B・C三航路の相互関係という問題でなければならぬ。

例えば、南伊勢地方でしか生産されない「伊勢型」鍋が、C航路沿岸ばかりでなく、関東地方の諸遺跡、特にA・B航路沿岸の遺跡からも出土しているという事実や¹¹、東国に多く分布する伊勢神宮領荘園が、葛西御厨や大河土御厨、相馬御厨など、特にA・B航路沿岸に分布しているといった事実が想起されよう。それは、伊勢と東国との太平洋交通が、品川からさらに江戸湾沿岸交通や利根川・常陸川水系を通じて、関東地方全体に浸透していたことを示しているに違いない。しかもその交通は荘園制成立期以来、中世を通じて存在し続けていたと思われるのである。

このように、A・B・C三航路がそれぞれ有機的に関連していたとするならば、それらの航路を結び付ける中継地点がどこかにあったに違いない。Bの利根川・常陸川水系に於ては、陸路との結節点である石浜（浅草）が言わば終起点としての意味を持っていたことが既に谷口氏らによって指摘されており、Cの太平洋交通に於ては、品川が終起点であったことが如上の高島・永原・綿貫・柘植各氏らの研究によって既に明確にされている。とすると、この浅草と品川

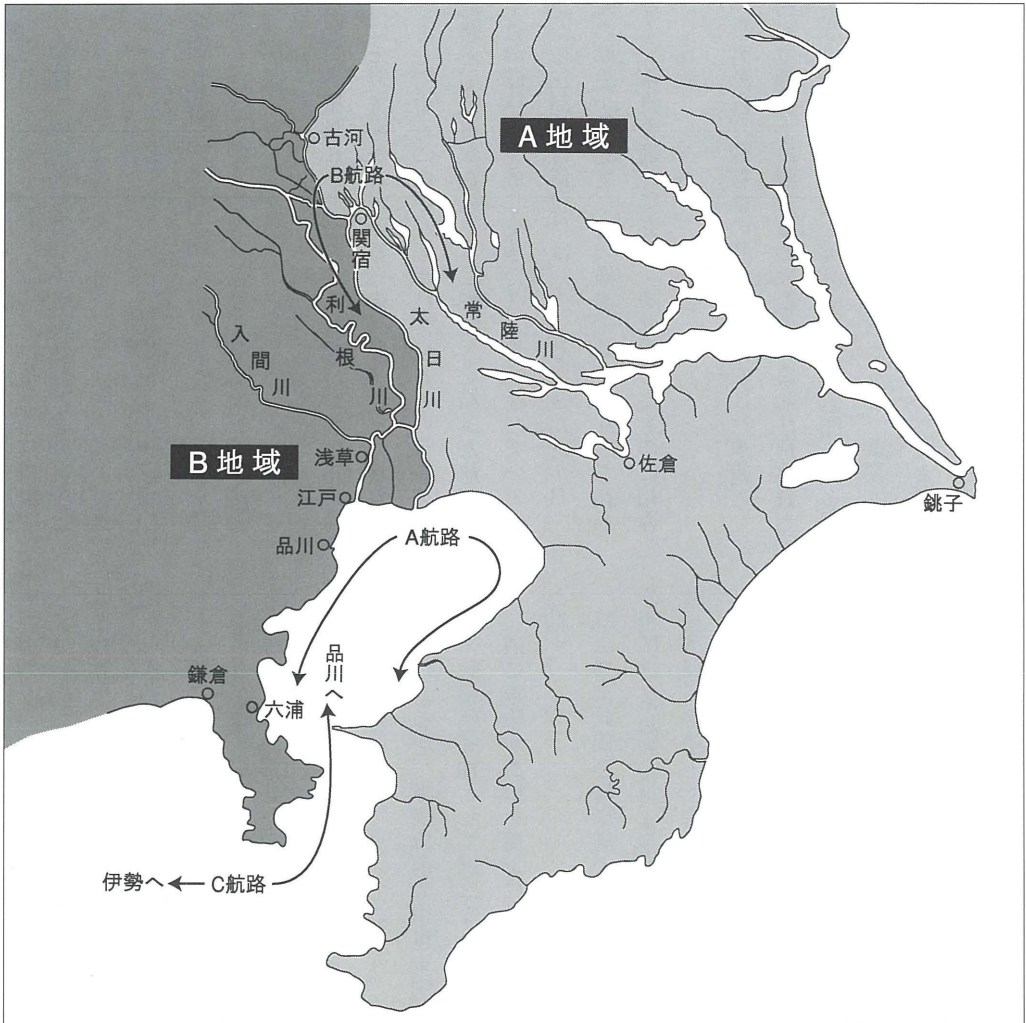


図 中世東国の水運とA地域・B地域

とを結ぶ水運上の中継地点、それこそ江戸前島という防波堤に囲まれた日比谷入江という絶好の停泊地を持つ中世の江戸だったのでなからうか。

太田道灌時代の江戸の風景を示すものとして有名な『江亭記』を見ると、「南顧すれば則ち品川の流れ、溶々濛々として以て碧を染め、人家北南に鱗差す。(中略)東望すれば則ち平川漂渺として長堤緩く廻り、水石瑰偉にして佳気鬱葱たり、之を浅草の浜と謂う。」(原文)とあり、江戸周辺の風景が、北や西のそれではなく、南の品川と東の浅草の風景によって描かれている。南の品川と東の浅草、この両者を結ぶものとして中世の江戸が描かれているという事実は、浅草から始まるB航路と、品川から始まるC航路とを結ぶA航路上の結節点として、中世の江戸が発展してきたことを示唆しているものと思われよう。かかる江戸の位置付けは、上述してきたA・B・C三航路の相互交流の歴史から見て、この道灌の時代になって初めて生じたものではなく、中世を通じて存在し続けていたものに相違ない。

そもそも江戸という名称は、源頼朝の挙兵に応じた江戸重長という武将の姓として初めて歴史上に現れるわけだが、この江戸重長という武将は、『義経記』に「江戸太郎八ヶ国の大福長者と聞く」と記されている。この「大福長者」という表現から考えると、重長は武将というよりむしろ大商人といった方が適切な人物であったと考えられる。彼の姓はその拠点の地名からつけられたものと思われるので、この時既に江戸という地域は存在したと思われるわけだが、そ

の江戸こそが、上述してきた東国水運の結節点として彼の商業活動を支えていたと考えられるのではなからうか。

このように見てくると、東国における江戸の位置は、既に中世初期から水運上の結節点として充分にその重要性をもっていたと考えられるのであり、家康が江戸を選んだのは余りにも当然の選択であったと言うことができる。しかし、本当に江戸の地が中世初期以来それほど重要な土地であったとするならば、今度は、最初の東国政権である頼朝政権が、何故江戸を選ばず鎌倉を選んだかという問題が、次なる疑問として湧いてこよう。そこで以下、いささか突飛な発想ではあるが、家康以前の中世東国政権が、何故江戸という土地をその政権所在地として選ばなかったのかという問題を考えることで、逆に家康が江戸を選ぶに至った必然性をより明確にしてみようと思う。

既に豊田武氏や峰岸純夫氏らによって指摘されている通り、中世の東国は概ね利根川を境として、伝統的大豪族層の蟠踞する東上野・下野・常陸・下総・上総・安房という地域(峰岸氏の言うA地域)と、中小武士団や国人層が党や一揆といった結合形態で存在する西上野・武蔵・相模・伊豆という地域(同じくB地域)とに大別することができる。伊豆で挙兵した頼朝は、この内の北条氏や三浦氏といったB地域の武士団をその政権基盤として出発した。そして石橋山の合戦に破れ安房に逃れた後、今度は上総氏や千葉氏といったA地域の豪族層を味方に引き入れることで政権を強化し、初の東国政権を打ち立てることに成功したわけである。

しかしながら頼朝は、独立の気風が強く、時として脅威を感じる程の実力を有していたA地域の豪族層を決して心からは信用していなかったらしい。平家追討軍を出発させた直後の寿永二年（一一八三）末、梶原景時をして上総介広常を暗殺させていることはその証左の一つとなろう。そもそも鎌倉幕府そのものが、最終的に足利氏や新田氏といったA地域の豪族層によって滅ぼされているという事実を想起されたい。頼朝にとつて最も安心できる政権基盤とは、B地域の中小武士団だったのである。そのような頼朝政権が、A地域とB地域との境界線ともいふべき利根川の河口にある江戸の地を、その政権所在地として選ばなかったのも、言わば当然のことといふことができる。

B地域の中小国人層をその政権基盤としつつ、A地域の大豪族層とは緊張関係をもって望むというこの構造は、室町時代においても基本的に同様であった。例えば享徳の乱において、関東管領と古河公方の勢力範囲は概ね利根川を境として南西と北東に明確に別れており、太田道灌の江戸城も、言わば関東管領方の先兵として両勢力の拮抗する位置に築かれた出城ともいふべきものであった。関東管領方の政権所在地はあくまでも鎌倉だったのである。そして戦国時代、北条早雲・氏綱・氏康が伊豆・相模・武蔵を攻略した時期の後北条政権においてもその構造に変化はなく、後北条氏はその政権所在地を小田原に置いたわけである。

この構造に変化が訪れたのは戦国末期の北条氏政・氏直政権期であったと考えられる。佐藤博信氏が「関八州国家体制」と称された

通り、後北条氏は越相同盟成立後の氏政・氏直政権期に於て、A地域に進出するようになる。これは「中世東国政権」が初めてA・B両地域を含めた東国支配を実現していく過程であったということもできよう。とすると、そうした変化を受けて政権所在地に関する認識にも若干の変化が出て来ていたのではなからうか。

最近発表された黒田基樹氏の研究によれば、氏直政権期、氏直の父で「御隠居様」と称されていた北条氏政は、江戸・岩槻・関宿・佐倉といった利根川・常陸川水系沿岸諸地域に対して支配関係文書を発給しているという。黒田氏はかかる動きを、氏政による「水の大動脈」支配を意味するものであったと見做され、特にそれら諸地域の基点に位置していた江戸は、後北条氏の関八州全域支配確立において中核的拠点として位置付けられていたと述べておられる。確かに先にも述べた通り、江戸は中世初期以来水運上の結節点として、東国の中で重要な位置をしめていた。そしてその地を政治的拠点とすることを阻んでいたのは、上述してきた利根川を挟むA地域とB地域の政治的対立であった。とするならば、その対立が解消された戦国末期において、江戸が東国政権の中核的拠点となりつつあったことは想像に難くない。

通説によれば、家康が入った頃の江戸は「太田道灌がかつて築いた城はあったが」、それもすたれて「わずかな家並みの漁村」となっていたとされている¹⁶。しかし、上述した通り太田道灌の築いた江戸城は、政治的にはあくまでも関東管領方の出先機関に過ぎなかったものであり、そうした江戸城を関東全域支配確立の中核的拠点へと成

長ささせたのは、北条氏政・氏直政権に外ならなかった。家康はすたれていた道灌の城跡に入ってこれを復興したのではなく、道灌の頃から更に発展しつつあった後北条氏の江戸城に入っていったと考えられるのである。

家康が江戸を選ぶに至った前提条件、それは、東国水運の結節点として中世初期以来徐々に積み上げられていたものであり、東国全域の政治的統一という事実を待って、家康が入る寸前の戦国末期には全て出揃っていたものだったのである。

おわりに

以上述べてきた通り近年急速に進展した中世東国水運史研究の成果を踏まえるならば、家康が入るまで江戸は小さな漁村であったという定説や、その寒漁村を自らの城下町に選んだのは家康の卓見によるものであるという定説は、今や大きく書き替えられなければならないまい。

しかし、それではこれまでの定説は、一体いつどのような人々によって作られてきたものだったのであろうか。管見の限り、家康以前の江戸を寒漁村とし、そのような江戸を選んだ家康の先見性を強調する認識は、享保初年、兵学者大道寺友山によって著された家康の逸話風伝記「岩淵夜話」にまで遡ることができる。

江戸東京博物館所蔵「岩淵夜話」によると、家康以前の江戸は「東の方平地之分ハこ、もかしこも汐入之芦原にて、町や侍屋敷を十町

と割付へき様もなく、扱又西の方ハひやうく」と芦原武蔵野へつ、きてどこをしまりと云へき様もなく」といった様子であり、また江戸城も「御城と申せハむかしより一国持大将の住たるにもあらず、上杉の家老太田道灌齋初めて繩をはりととり立、其後北条家之遠山住居せし迄之事なれハ、城もちいさく堀のはゞもせまく、門屏之躰にて」といった有り様であったという。そしてこのような江戸を選んだのは、「芦原之時に後々末々迄繁昌之地たるへきと御下墨」されたところの「大神君之御賢慮」によるものだとしているのである。今日の定説がこの「岩淵夜話」の系譜を引くものであることは明白であらう。

こうした伝説がどのような過程を辿って生み出されてきたのかを検討することは、それ自体たいへん興味深いことではあるが、今それについて詳しく論じる余裕はない。ただこれが天正から一世紀あまりを経た享保初年、徳川吉宗が日光社参を再開するなど、家康の神格性が再び強調されてくる時代の中で生み出されてきたものであることを考えるならば、ここに家康の功績を高めようとする意図が働いていたことはほぼ間違いない。とすると、中世の江戸と言えば太田道灌の江戸とされるようになっていったのも、家康の功績を高めるために、家康が入る寸前の後北条政権下の江戸をことさらに低く評価した結果、相対的にその前の太田道灌時代の江戸が高く評価されていたためではなからうか。いずれにせよ、今日の通説が家康の神格性を高めるために作り出された「家康神話」「道灌伝説」とも言うべきものであったことは間違いない。我々は、

そろそろこの「家康神話」「道灌伝説」から脱却する必要がある。

そもそも「江戸東京学」は、明治の人たちが「江戸時代の文化的遺産を全く認めなかったこと」を批判し、江戸と東京を連続して捉える視点から出発した¹⁾。新時代を築いた人々が、前代の遺産をあえて認めようとする傾向は古今東西に認められ、それがえてして歴史を歪めてきたことについても贅言を要しない。「江戸東京学」はこの構造を看破した。ならば今度は、江戸幕府を支える人々が、中世、なかんずく戦国時代の後北条政権による遺産を全く認めなかったことを批判し、あらためて中世の江戸と近世の江戸を連続して捉えていくべきなのではなからうか。

ところで江戸東京博物館は、我が国で初めての「本格的な都市史博物館」であり、そうであるが故にその展示や資料収集は、「徳川家康が江戸に入府してから東京オリンピックに至る約400年間」を中心として行われてきた(『江戸東京博物館総合案内』ほか)。中世までの江戸の歴史が、都市の歴史において意味がないと考えられていた状況においてはこれも当然のことであろう。しかし上述してきた通り、江戸が都市として発展する前提条件が、中世に於て既に出現していたことが確実である以上、当館が「都市史博物館」として主に扱うべき対象範囲も大きく拡げていかねばなるまい。

しかもそれは、単に江戸東京学や江戸東京博物館のみの問題ではない。中世史と近世史の「断絶」が指摘されて久しいが、上述してきた中世東国水運史研究においても、これを近世都市江戸との関連で考察した仕事は黒田基樹氏の論文以外に見当たらず、逆に近世都

市史研究の中で、今日これ程盛んになった中世東国水運史研究の成果を取り入れた業績は、鈴木理生氏の著書以外管見に触れない。

「家康は何故江戸を選んだのか」という課題の真の解明のためには、まず何よりもこうした中世史と近世史の断絶を打ち破り、両者の対話を始めることが必要であろう。そして更に、例えば南伊勢地方でしか生産されない「伊勢型」鍋が関東地方の諸遺跡で出土するという事実の発見が示唆するように、関西の研究と関東の研究、文献史学と考古学、都市史と交通史といった様々な分野の協業によって、この課題はより豊かな歴史像を描いていくことができるものと思われる。

〔註〕

(1) このような通説は枚挙に暇がないほどその実例を挙げることができ、例えば当館もその『総合案内』(一九九三年)の中で、「当時の江戸は、太田道灌がかつて築いた城はあったが、わずかな家並みの漁村だったようである。家康が、上方に対する軍事的要地の小田原や、武家政権の伝統をもつ鎌倉でなく、あえて江戸を本拠地とした理由は、江戸が広大な後背地と水運の便に恵まれ、将来への発展の可能性を秘めていたことに着目したからであろう。」と解説している。

(2) 今日の江戸川・中川・隅田川に相当する河川が、中世においてどのような流路であったかについては判然としない。そもそも「中世」と一口にいっても、十二世紀から十六世紀までの五世紀にわたり、その間に様々な流路の変遷があったと考えられるのである。例えば江戸東京博物館の通史展示室にある「東京湾変遷模型」の中の「約400年前」の地図模型は、中世末期の流路を復元しているわけだが、それによると利根川(今日の中川)と太日川(今日の江戸川)

とは、今日の水元公園あたりで若干つながっているが、隅田川とは全くつながっておらず、隅田川は入間川（今日の荒川）の末流として捉えられている（東京都江戸東京博物館調査報告書第1集『東京湾変遷模型原図』一九九四年）。しかしながら本稿では、隅田川がそもそも下総と武蔵の国境であったという事実や、「正保年中改定図」に亀有から須田（墨田）へと抜ける流路（古隅田川）が描かれているということなどから、中世を通じて隅田川は、利根川の末流であったに違いないと考えた。そこで、利根川が太日川と入間川にそれぞれ流れ込んでいたとする久保純子氏の説（『東京低地の水域・地形の変遷と人間活動』大矢雅彦氏編『防災と環境保全のための応用地理学』、古今書院、一九九四年）に従って論を進めることとする。

(3) 小笠原長和氏「中世の東京湾——房総と武相との関係——」（『史観』四七号、一九五六年）、「東国史の舞台としての利根川・常陸川水系」（東国戦国史研究会編『関東中心戦国時代史論集』名著出版、一九八〇年）、高島緑雄氏『品川区史』通史編「中世編」（一九七三年）三二七—三五七ページ、さらに高島氏は一九八八年に「中世南武蔵の郡郷と交通——荏原郡を中心に——」と題する研究発表を、地方史研究協議会大会で行っておられ、また一九九二年には、後述する峰岸純夫氏・柘植信行氏そして北原進氏と「江戸湾岸の中世史——荏原地域を中心に——」と題する座談会を行っておられる（『史誌』三六号、一九九二年に掲載）。

(4) 網野善彦氏の一連の主著としては、一般向けのものとして『無縁・公界・衆』（平凡社選書、一九七八年）、『日本中世の民衆像』（岩波新書、一九八〇年）、「東と西の語る日本の歴史」（そして文庫、一九八二年）などが有名であるが、特に東国水運史について積極的な提言を行った論文としては「中世前期の水上交通について」（『茨城県史研究』四三三号、一九七九年）がある。そして、その後も「海民の社会と歴史（二）——霞ヶ浦・北浦——」（『社会史研究』二号、一九八三年）や、「金沢氏・称名寺と海上交通」（『三浦古文化』四四号、一九八八年）、「太平洋の海上交通と紀伊半島」（『海と列島文化』

第八巻『伊勢と熊野の海』小学館、一九九二年）といった論文を発表し続けておられる。

(5) 遠藤忠氏「古利根川の中世水路関」（『八潮市史研究』四号、一九八一年）、安池尋幸氏「中世・近世における江戸内海渡船の展開——富津・野島間の渡船の場合——」（『神奈川県史研究』四九号、一九八二年）、鈴木哲雄氏「古隅田川地域史ノート」（『春日部共栄高等学校研究収録』二号、一九八二年）、「古隅田川地域史における中世的地域構造」（『千葉史学』四号、一九八四年）、原田信男氏「利根川の水運」「水運と陸運」（『鷲宮町史』通史編上、一九八六年）、太田富康氏「利根川下流地域の水運利権——鎌倉・南北朝期の香取社と称名寺——」（『埼玉地方史』二二二号、一九八七年）、湯山学氏「戦国時代の六浦・三浦——房総との関係を中心に——」（『中世房総』二号、一九八七年）、盛本昌広氏「走湯山燈油料船と神崎関」（『千葉史学』一三三号、一九八八年）、「中世東国における塩の生産と流通」（『三浦古文化』四五号、一九八九年）。

(6) 上行寺東遺跡の保存運動を通じた研究成果としては、『歴史手帖』一四卷三号、特集「神奈川六浦と上行寺遺跡」（一九八六年）や、『神奈川地域史研究』第三・四合併号、特集「上行寺東遺跡と保存運動」（一九八六年）、あるいは、上行寺東遺跡を考える会編『中世の六浦と上行寺東遺跡』や、『六浦文化研究所編』『六浦文化研究』に掲載された諸論文などがある。特にその後の東国水運史研究に大きな影響を与えた業績として、石井進氏「中世六浦の歴史」（『三浦古文化』四〇号、一九八六年）をあげることができよう。

(7) 永原慶二氏「内乱と民衆の世紀」（『大系日本の歴史』六、小学館、一九八八年）二九三—二九六ページ、「熊野・伊勢商人と中世の東国」（小川信先生古稀記念論集『日本中世政治社会の研究』続群書類従完成会、一九九一年）、「伊勢・紀伊の海賊商人と戦国大名」（『知多半島の歴史と現在』四号、一九九二年）、「伊勢商人と永楽銭基準通貨圏」（同上五号、一九九三年）、「戦国期伊勢・三河地方の物資流通構造」（同上六号、一九九四年）、永原氏・小川信氏「対談 徳川家

- 康以前の江戸——大都市発展の前史を探る——」(『江戸東京博物館準備ニュース』四号、一九九二年)、綿貫友子氏「『武蔵国品河湊船帳』をめぐる——中世関東における隔地間取引の側面——」(『史艸』三〇号、一九八九年)、「中世東国と太平洋海運」(『六浦文化研究』二号、一九九〇年)、「海上・水上の道を探る」(『新視点日本の歴史』四、新人物往来社、一九九三年)、「尾張・参河と中世海運」(『知多半島の歴史と現在』五号、一九九三年)、「中世後期東国における流通の展開と地域社会」(『歴史学研究』六六四号、一九九四年)、「神人と海運——関東渡海の神船をめぐる——」(羽下徳彦氏編『中世の地域社会と交流』吉川弘文館、一九九四年)。
- (8) 峰岸純夫氏「中世東国の水運について」(『国史学』一四七号、一九九〇年)、「インタビュー——中世東国の水運史研究をめぐる——」(『歴史評論』五〇七号、一九九二年)、「中世東国水運史研究の現状と問題点」(『中世東国の物流と都市』山川出版社、一九九五年。尚、本稿末の付記参照)。
- (9) 湯浅治久氏「中世の『二子浦』覚書」(『市立市川歴史博物館年報』一九八七年)、「東京低地と江戸湾交通」(葛飾区郷土と天文の博物館特別展図録『下町・中世再発見』、一九九三年)、「東京低地と江戸湾交通」(葛飾区郷土と天文の博物館シンポジウム報告集『東京低地の中世を考える』名著出版、一九九五年)、「柘植信行氏「中世品川の信仰空間——東国における都市寺院の形成と展開——」(『品川歴史館紀要』六号、一九九一年)、「中世品川の寺院形成」(『歴史手帖』二巻一号、一九九三年)、「開かれた東国の海上交通と品川湊」(『中世の風景を読む』二『都市鎌倉と坂東の海に暮らす』新人物往来社、一九九四年)、「谷口栄氏「下総葛飾郡大鳴郷の故地」(『東京考古』八号、一九九〇年)、「品川歴史館所蔵常滑大甕」(『品川歴史館紀要』六号、一九九一年)、「下山治久氏・福島金治氏「対談「江戸湾の歴史」展に寄せて」(『横浜開港資料館館報』開港のひろば』三〇号、一九九〇年)、「高野修氏・中尾堯氏・伊藤克己氏・柘植信行氏「品川の寺々——都市と寺院の成り立ち——」(『品川歴史館紀要』八号、一九九三年)、「さらに一九九四年には、湯浅・宮瀧両氏も参加したシンポジウム「中世関東の物流と都市」が、第九二回史学会大会において開催され、一九九五年にはその報告内容をまとめた『中世東国の物流と都市』(山川出版社)が刊行された(付記参照)。
- (10) 上述してきた以外のもの、中世東国水運史に論及した近年の主な研究としては、佐藤博信氏「十六世紀前半における江戸湾をめぐる房総諸勢力の動向——とくに品川「妙国寺文書」の禁制をめぐる——」(『金沢文庫研究』二八六号、一九九一年)、「東国における享徳の大乱の諸前提について——鎌倉公方足利成氏の徳政令發布をめぐる——」(『歴史評論』四九七号、一九九一年)、「岡田清一氏「大川戸御厨をめぐる二、三の問題」(『埼玉県史研究』二六号、一九九一年)、「相馬御厨をめぐる中世の水運」(『沼南町史研究』二号、一九九一年)、「浜名敏夫氏「中世江戸湾の海上交通」(『千葉史学』一九九一年)、「市村高男氏「中世東国における房総の位置——地域構造論的視点からの概観——」(『千葉史学』二二号、一九九二年)、「和泉雄三氏「中世の海上交通」(『函大商学論究』一五巻一号、一九九二年)、「井原今朝男氏「幕府・鎌倉府の流通経済政策と年貢輸送——中世東国流通史の一考察——」(永原慶二氏編『中世の発見』吉川弘文館、一九九三年)、「川島優美子氏「中世関東内陸における香取社の位置」(『地方史研究協議会編「河川をめぐる歴史像——境界と交流——』雄山閣出版、一九九三年)、「中世関東における水運システム解明のための一試論」(『茨城県史研究』七一号、一九九三年)、「鈴木哲雄氏「中世香取社と「浦・海夫・関」について」(『中世房総』七号、一九九三年)、「滝川恒昭氏「房総里見氏と江戸湾の水上交通」(『千葉史学』二四号、一九九四年)などがある。
- (11) 谷口栄氏「葛西城出土の「伊勢型」鍋について」(『竹筥』三号、一九八七年)、「伊藤裕偉氏「中世南伊勢系の土師器に関する一考察」(『Mishoryu』vol.1、一九九〇年)、「南伊勢系土師器の展開と中世土器工人」(三重県埋蔵文化財センター「研究紀要」一号、一九九二年)、「南伊勢系土師器の生産と分布」(葛飾区郷土と天文の博物館

特別展図録『下町・中世再発見』、一九九三年。

- (12) 無論、『義経記』は中世後期の成立にかかるとされておられ、そのまま、中世初期の江戸重長の姿を正しく描いているとは考えがたい。しかし少なくとも『義経記』を生み出した頃の江戸が、かかる伝説と違和感がないほど、商業的な発達を見せていたということだけは確実である。また、『吾妻鏡』においても重長は、房総半島から武蔵国に入ろうとした頼朝の行く手を阻んだ武将として登場しており、利根川河口の実権を握る武将であったことは疑いない。

- (13) 豊田武氏「中世の関東」(『下野史学』八号、一九五六年、後に戦国大名論集三『東国大名の研究』吉川弘文館、一九八八年に収録)、峰岸純夫氏「上州一揆と上杉氏守護領国体制」(『歴史学研究』二八四号、一九六四年、後に同氏著『中世の東国——地域と権力——』東京大学出版会、一九八九年に収録)、なお峰岸氏はこの構造を基本的には中世後期の東国を特色付けるものとして扱っているが、豊田氏の指摘通りこれは中世を通じて認められる傾向と言える。

- (14) 佐藤博信氏「戦国期における東国国家論の一視点——古河公方足利氏と後北条氏を中心として——」(『歴史学研究』一九七九年度大会別冊特集「世界認識における地域と民衆」、一九七九年、後に同氏著『古河公方足利氏の研究』校倉書房、一九八九年に収録)、なお同氏は、前掲『東国大名の研究』にも同論文を収録しておられ、その「解説」の中で、特に豊田・峰岸両氏によって指摘された北関東(A地域)と南関東(B地域)との対立という構造に注目され、その対立構造が解消されていく過程として後北条期を捉えておられる。

- (15) 黒田基樹氏「御隠居様」北条氏政と江戸地域——戦国末期江戸の史的的位置——(『東京都北区教育委員会』『文化財研究紀要』第七集、一九九四年、後に同氏著『戦国大名北条氏の領国支配』岩田書院、一九九五年に収録)、なお本稿は、一九九三年九月に第一六七回戦国史研究会で行われた同氏による同内容の研究発表に触発されたものであり、言わばこの黒田論文の問題意識をもって研究史の整理を行って見たものに外ならない。

- (16) 『江戸東京博物館総合案内』など。詳しくは註(1)を参照のこと。

- (17) 小木新造氏『江戸東京学事始め』ちくまライブラリー、一九九一年、など。

〔付記〕

本稿脱稿(一九九五年八月二十一日)後、峰岸純夫氏・村井章介氏編『中世東国の物流と都市』(山川出版社、一九九五年一月)が刊行された。同書は、東国水運研究史上において決して見逃すことのできない研究成果といえることができるが、脱稿後のためこの成果を十分に活かすことができなかった。また同書には、峰岸氏の「中世東国水運史研究の現状と問題点」という詳細な研究史整理の論文が掲載され、巻末には研究文献目録が収められている。本稿も研究史の整理を目的の一つとしており、峰岸論文と重複する部分も多々あることは否めない。しかし本稿はあくまでも「江戸」を中心とした切り口で東国水運研究史をまとめたという意味で、包括的な研究史の把握を旨とした峰岸論文とはまた違った意味も存在するのではないかと考えている。御寛恕の程をお願い申し上げます次第である。